

# 学習院アーカイブズ ニューズレター

# 23

Gakushuin Archives Newsletter 2024.7.16 vol.



## 屋外で卓球を楽しむ生徒たち 1962(昭和37)年

中等科は1957年の第2学期に戸山校舎から目白校舎に移転した。1963年には創立八十五周年記念事業の第二次整備計画により、高等科・中等科共用の体育館が高等科校舎の南側に建てられた。中等科卒業アルバムに取められた、当時の生き生きとした学生生活が伝わる1枚。(学習院アーカイブズ所蔵)

## Contents

アーカイブズが紡ぐ関係性のネットワークをながめる 学習院大学計算機センター/ 人文科学研究科アーカイブズ学専攻 教授	久保山哲二	2
短大創設のころ	学習院アーカイブズ 桑尾光太郎	4
アーカイブズ(土壌)と年史編纂(種子) 一知的好奇心の花開くとき 学習院アーカイブズ	小根山美鈴	6
主な活動(2024年2月~2024年6月)		8



# アーカイブズが紡ぐ関係性の ネットワークをながめる

計算機センター・人文科学研究科アーカイブズ学専攻 久保山哲二

## 学習院アーカイブズへの訪問

計算機センターは今年度で設立50周年を迎えました。私の在職期間は、センターの歴史の三分の一にも満たないため、設立の経緯やこれまでの歴史については知らないことばかりです。そこで、今年度のはじめに、計算機センターの設立の経緯や、これまでの道のりを辿ることができる資料をもとめて学習院アーカイブズを訪れました。アーカイブズ学専攻を兼任して5年になりますが、これが初めての訪問でした。

学習院アーカイブズでは、計算機センターの歴史を辿る資料を丁寧に探していただき、いくつかの手がかりを得ることができました。

## 所蔵資料の目録データ

学習院アーカイブズでは受け入れた膨大な資料の整理が進められており、その一環としてアーカイブズの国際的な内容記述の標準ガイドラインであるISAD(G)に基づいて資料目録が作成されています。この目録には現在、一万二千件以上の資料項目が収められており、各項目には写真や会議資料などの内容、作成・収集した人や組織、作成日付、受け入れ日付などのデータが記載されています。この目録整備により、資料間の関係性や資料の集合的な性質が潜在的に表現されており、資料を生み出した人や組織の活動プロセスがわかるようになっています。

私はアーカイブズの実務経験はなく、実際の目録作成をしたこともありませんが、その作業が大変に骨の折れるものであることは容易に想像が付きまします。学習院アーカイブズにおける目録作成の経緯と意義については過去の学習院アーカイブズ・ニューズレターに解説があります<sup>1)</sup>。この解説の中で、小根山美鈴氏は、「目録作成は、記録を位置づける大事な仕事でありながら、第三者に見えない地道なものである」と述べています。本稿は、この目録に少し光をあて、第三者にもその成果の一端を目にしてみよう試みです。

私はコンピューター科学を専門としており、普段の研究活動では直接アーカイブズを利用することはありません。しかし、資料目録などのアーカイブズ記述によって資料間の関連性やコンテキストがどの

ように表現され、どのような構造を持っているのか、特に実際のデータに基づいて理解することに関心を持っています。

そこで、学習院アーカイブズの目録データを用いて、資料や人・組織がどのようにつながっているかを可視化してみました。アーカイブズ学における目録が単なる個々の資料のリストではなく、他の様々な資料や人や組織との関係性の中で、資料を位置づけるためのデータであることを少し理解していただけるのではないかと思います。特定の資料や人・組織のまわりにどのような関係性が広がっているかを視覚的に捉えることで、資料の新たな価値や意義を発見する手がかりになるかもしれません。

## 関係性と構造

学習院アーカイブズの目録データには、次の2つの関係性が含まれています。

- ・「資料」と、その資料を作成・収集・管理した「人」や「組織」との関係
- ・「資料」とそのまとまりである「資料群」の階層関係

まず、「資料」と、その資料を作成・収集・管理した「人」や「組織」との間の関係については、次のようにつながりを図示しました。



学習院アーカイブズが所蔵している資料「学習院のWebページデータ一式」は組織「計算機センター」が管理していた資料ですので、上の図で関係を図示できます。

次に、「資料」と個々の資料をまとめたファイルや、一連の簿冊といった、より大きな資料のまとまりである「資料群」との間の階層関係については、資料目録に階層的に記載されています。この階層関係については、次のように図示しました（三階層の場合の例です）。



たとえば、資料「計算機センター樹木伐採及び建



# 短大創設のころ

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

2024年5月、学習院女子大学・学習院女子大学大学院は、2025年4月入学者をもって学生募集を停止することを発表した。前年公表されたように、女子大学は2026年度より学習院大学と統合される計画である。本稿では戸山キャンパスにおける女子高等教育の始まりである学習院大学短期大学部の創設について、アーカイブズ所蔵の資料や、既刊の沿革史を繙きながら前後の経緯を略述してみたい。

(女子部) では、6月2日に古賀軍治女子高等科長から「女子部に前期大学Junior Collegeを設置する問題考慮中 この形について考えてほしい 近日中に委員会発足の予定」との報告が行われた。そして7月1日、天野貞祐大学教授が委員長をつとめ常務理事、大学教員、女子部教員の9名を委員とする短期大学準備委員会が設置された。同委員会が9月14日、1950年度からの短大設置を決定したことが、翌15日の女子部において古賀科長より報告されている。

しかしまもなく「戦災の被害復旧・私学移行による諸費用急増のため、短大設置は一年見送って、二十六年度とする」安倍能成院長の裁定が下ったという。これに対して女子高等科父母会幹事は天野準備委員会委員長に「直談判」を行い、裁定が撤回された(湯本和子「短大誕生と父母会」『三十年』所収、1981年)。49年10月28日の学習院理事会議事要旨には、安倍院長からの次の報告が記されている。

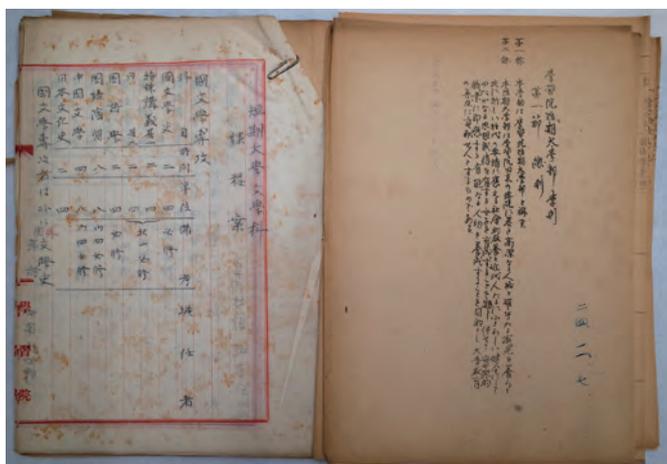


図1 短大開設時に作成された文書(学習院アーカイブズ所蔵)

短期大学設置については、先般、早急の実施困難なる事情あり、一応中止したのであるが、女子高三の父兄方の切なる御希望により、再考の結果設置することとし締切後であるが特に受付けて貰ふやう文部省の承認を得た。教授は現陣容で大体間に合ふと思ふし、教室については若し女子部に置くとすれば四教室を充当出来、又収支の方は略、償ふものと思ふ。(「理事会関係書類」学習院アーカイブズ所蔵)

短期大学の制度は、四年制の新制大学が発足した1949(昭和24)年に入って本格的な検討が行われた。同年1月、教育刷新委員会は「二年又は三年制の大学について」の建議を採択し、これを短期大学と称することとした。5月に文部省は学校教育法を一部改正して短期大学の規定を盛り込み、8月には「短期大学設置基準」が決定して1950(昭和25)年度から発足することとなった。同基準の冒頭には「短期大学は、高等学校の教育の上に二年(又は三年)の実際的な専門職業に重きを置く大学教育を施し、良き社会人を育成することを目的とする」と記されている。

その後「学習院大学短期大学部設置認可申請書」が10月10日付で文部大臣宛に提出され、翌1950年3月14日付で設置が認可された。申請書に添付された「学習院大学短期大学部設置要項」には、その目的および使命が「学習院教育の方針に従い高潔な人格と確乎とした識見を養い時代の要請に応える社会的教養と健全にして豊かなる思想感情を有し、かつ実際の職業に即応する有能な女子を養成すること」とうたわれ、「学習院大学短期大学部学則」(昭和25年

学習院で短大の設置が検討され始めたのは、学校教育法の改正が明らかとなる1949年5月頃からで、とくに女子高等科を翌年春に卒業する生徒の父母の間に設置の要望が強かったという。女子中・高等科



図2 短大初期の授業（阿部俊子教授『三十年』所収）

4月1日施行)の第二条にもこの文言が記載されている。また50年1月には開学準備のための短期大学開設委員会が設置され、教員の人選や入試方法などにつき協議が重ねられるとともに、短期大学部長には小宮豊隆が就任することとなった。小宮は東北帝国大学教授・東京音楽学校校長などを歴任し、安倍能成とは夏目漱石の門下の頃からの盟友であった。安倍院長は第1回の学生募集にあたり「趣意書」(昭和25年2月)のなかで、「その志す所は社会人、家庭人としてのより高い知識と教養、職業人としての専門的学問と技術を習得せんとする現代女子青年の要望に応え、婦人の個人的生活の充実と社会的関心の向上とによつて文化国家としての新日本に堅固な基礎を供するにある」として、次のように続けた。

学習院は全国にも稀な古い学校であり由緒ある特殊な存在であつたが、今や時代の大変革に際して、門戸を開放し、制限を撤廃し、歴史と伝統とをふまえて、艱難な新時代に生き抜くと共に、この新時代を生かす有力な養源たらんとの念願に基いて敢て女子短期大学を始めた次第である。天下同志の方々の協力を仰ぎたい。

こうした経緯を経て、1950年4月、短期大学部文学科が開学し、翌51年には家庭生活科を開設、短期大学部は1953(昭和28)年より学習院女子短期大学に改称した。さらに1998(平成10)年には4年制の学習院女子大学が開学し、女子短期大学は2001(平成13)年に廃止された。1997(平成9)年4月6日、短大として最後の入学式において、近藤不二学長は

新入生に次のように呼びかけている。

さて、皆さんは学習院女子短期大学の最後の入学生である。あるいはすでに知っているかも知れないが、来年度から本学は改組転換し四年制の学習院女子大学になる(申請中)予定である。短大の素晴らしさ長所を語りながら、矛盾するようと思われるが、時代の流れは早く、女子の高学歴化はめざましい。(中略)女子高学歴志向に応えようとして本学でも大学への改組を決めた。しかし、学習院女子短期大学と学習院女子大学は別のものではない。異なった大学でないだけでなく、同じ大学であることをここに強調したい。同じキャンパスに同じ校舎に、現在の教授陣をそのまま受け継いで大学は開設される。学習院大学があるのに、あえて別組織の学習院女子大学を申請しているのも、学習院女子短期大学の歴史と伝統、それが持つ誇り高い文化を大切にしたいと考えたからである。学習院女子短期大学の魅力と長所を残したいからである。(『半世紀 学習院女子短期大学史』2003年)

1947(昭和22)年に学習院が財団法人として再出発した当初から、「大学開設」は大きな目標であり、いわば大学の成功が私立学習院浮沈の鍵を握っていた。そのためか学習院大学開学に関わる諸資料は、学習院アーカイブズにも多く残されている。他方で短期大学は、開学までの意思決定や申請・設置認可に至るまでの過程が慌ただしかったせいも、短大設置時に作成された一部の文書や、『学習院百年史』が編纂されていた1970年代に実施された座談会原稿などの他は、前述した短大設置の準備委員会や開設委員会の活動を示すまとまった資料は確認することができなかった。女子大学や女子部に残される資料も含めて、改めて資料の調査と整理・保存の大切さを思い知った次第である。

女子大学の学習院大学への統合は、短大創設期以来の「時代の大変革」への対応かもしれない。70年以上にわたり短期大学・女子大学で育まれてきた「歴史と伝統、それが持つ誇り高い文化」が、今後も継承され、あるいは姿を変えながら発展していくことを期待したい。

# アーカイブズ(土壌)と年史編纂(種子)

—知的好奇心の花開くとき

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

## 1. アーカイブズと院史編纂の関係性

異分野の話になるが、今から135年前にイギリスの外科医Stephan Paget博士が提唱した、「Seed and Soil」という説がある。癌細胞を植物の種子(Seed)に、臓器の環境を土壌(Soil)に例え、特定の臓器でのみ増殖する癌細胞のプロセスは、植物の種をいろいろな場所にまくと適した土壌でのみ発芽し、成長することと似ているという仮説である。現代ではその背景にある仕組みが次第に解明され、今なお現役の理論として引用されているようだ。

さて、癌の例えはいささか物騒で恐縮なのだが、SeedとSoilのような関係性は、いろいろな物事や場面で見られるものではなかろうか。筆者は、アーカイブズと院史(年史)編纂の関係性にもどこか似ているものを感じるのである。情報に偏りなく整備されたアーカイブズを土壌として院史が編纂され、完成した出版物が読む人々にとって栄養分のある種となる。両者は相互作用と協力によって成長していく関係性があるのではないかと考えたからである。本稿では、院史編纂(Seed)と学習院アーカイブズ(Soil)

の関係性について、少しだけ掘り下げて考えてみたい。

## 2. 過去の院史編纂はSeed and Soilの起源

一般的に、日本におけるアーカイブズの歴史は浅く、自治体史や大学史、社史などの編纂事業の過程で収集された資料を保存・活用するために設置された経緯をもつ機関が多い。かくいう学習院アーカイブズも、その土台は過去の院史編纂事業が契機である<sup>1)</sup>(図1)。これまでの学習院史とは、学習院創立から年を区切った周年の出版物のことであり、歴史叙述を主体としたものや、写真中心の図録などが存在する。図中の矢印は編纂資料、つまり編纂主体の議事録やノートなどの活動記録や、独自に調査・作成した資料を表す。

そして、各院史編纂の方針に沿って資料が収集・蓄積されるありさまを矢印の横線で表した。ここでいう収集資料とは、オリジナルの資料(かつ、編纂委員の解説文を資料と一緒に綴じ込む形態もある)や、情報提供者から借用した複写資料や参考となる資料のことである。例えば、創立八十五年記念に刊行された『学習院の歩み』<sup>2)</sup>の場合、当時の学習院史編纂委員会は、空襲により失われた戦時期資料の収集に力を注いだ。現に、学習院アーカイブズ所蔵資料の資料群「改組時資料」(S0291:レファレンスコード)などがそれに該当する。しかし、当時これらの収集状況が芳しくなかったため、同編纂委員会は座談会を企画して口承記録を残すことを試みた。録音テープの文字起こし原稿は編纂資料のひとつと言えるだろう。

口承記録を作成する編纂方式は、八十五年史に次いで百年史編纂(『学習院史』全三編)でも委員長を務めた児玉幸多によって、本格的に受け継がれる。学習院アーカイブズに残る百年史編纂時の資料は他に比して残存数が多く、約530点にのぼる。教職員の職歴や、施設・教務・庶務などに関する事項をカード一枚一枚に丁寧に転記された木製カード棚は、現

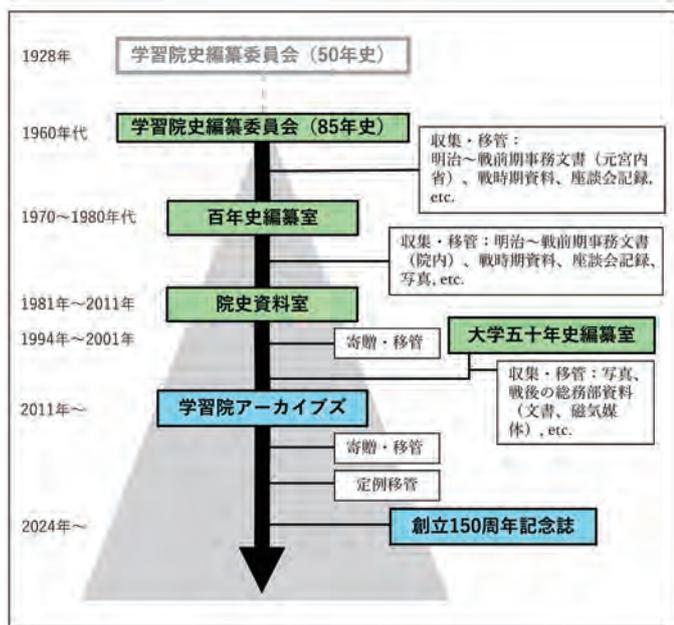


図1. 学習院史資料の形成過程



図2. 百年史編纂時代に作成されたカード

在でもレファレンスの際に学習院アーカイブズ職員にとって利用率の高い編纂資料である(図2)。また、この時期より写真収集も精力的に行っており、その後の学習院大学五十年史編纂同様、整理された写真アルバムは今も大活躍している資料群である。

### 3. Soilとしてのアーカイブズの役割

2011(平成23)年に学習院アーカイブズが設置され、院史編纂はアーカイブズ業務のひとつに位置づけられるようになった。学習院アーカイブズの新たな役割を以下3点にまとめることができる。第一に、これまで蓄積された資料を包括的に保存・管理する制度が整ったことももちろんだが、非現用文書の移管制度が新たに加わったことにより、組織の記録を継続的に残すという観点が新たに備わったことである。院史編纂で扱う資料よりも広範囲な資料が学習院アーカイブズに蓄積されることになるので、編纂担当者の思い込みで資料を選ぶことなく、何かを調べる際の最初に調べる辞書的役割を果たす機能を有するようになった。

第二に、学習院アーカイブズが整っていれば(目録や保存環境、活用できる体制などが整っていれば)、アーカイブズ資料の使い手は編纂担当者に限らず、院内外のあらゆる人々が利用できることになるはずである。それぞれの興味、あらゆる視点で院史を分析・検証できるようになるため、より広く、多層的に学習院を知ってもらえる効果をもたらす。

第三はアーキビストの目線になるが、「この資料は誰が(個人あるいは組織)いつ、どのような目的・活動で作成されたものなのか、どのような経緯で学習院アーカイブズにやってきたのか」という情報を利用者に伝えることを重視し、かつ、受け入れる前

段階のモノとしての状態をなるべく保持する役割が備わった。ありのままの資料をありのままに残せるように努めることが、正しい情報を伝える近道となるためである。

他方、院史編纂特有の集中的な資料収集と、そこから分析・研究によって得られた情報は、学習院アーカイブズ所蔵資料をより豊かなものにさせる。編纂を重ねるごとに蓄積されれば、より重厚で学習院に特化したアーカイブズ(Soil)が出来上がることになるだろう。結果、SeedとSoilは決して一方的でなく、相互作用のある関係性なのである。

### 4. Seed and Soilのその先に

2027(令和9)年の学習院創立150周年に向けて、学習院アーカイブズでは、今年度より記念誌編纂が正式に稼働する運びとなった。筆者は、記念誌編纂の担当者が使いやすいようなアーカイブズに整えることが急がれる。ただし、アーカイブズを整えること、記念誌編纂を出版することが学習院アーカイブズのゴールではない。そこから発展して、学習院アーカイブズの利用者や院史編纂・記念誌編纂の読者たちに知識の芽が出て好奇心の葉となり、何か新しい発見やアイデアが生まれた時が花となるのではないかと思う。

最後に、今回紹介できなかった学習院各学校で発行された沿革史は図3の通りである。これまでの院史編纂などでつながった各学校とのネットワークを大切に育みたい。



図3. 各学校のおもな沿革史刊行物

- 1) 学習院アーカイブズ前身組織の変遷については、桑尾光太郎「学習院アーカイブズの設立まで」『学習院アーカイブズニュースレター』12号(2018年7月)に詳しい。
- 2) 詳細については、保坂裕興「現在から未来へのとびら二題」同14号(2019年7月)を参照。

## 主な活動（2024年2月～2024年6月）

### ◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別（5部署）
- ③各部署に保管されている評価選別済保存文書の引取（10部署）・移管（8部署）
- ④文書管理に関する支援

### ◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③劣化資料に対する保存修復  
常磐会所蔵下田歌子額書修復・複製への支援
- ④外部倉庫から収蔵庫への資料搬入・配架

### ◆資料受入れ（受贈・購入）

- ①総務課所蔵写真アルバム（1990年代）
- ②女子学習院写真（昭和初期、7点）
- ③女子部学校案内・バザー資料等（昭和40年代）



バザー案内、運動会パンフレット

### ◆講演会、教育・広報支援等

- ①新任職員研修「学習院の歴史—史資料からみる学習院の教育・キャンパス・学生—」（4月1日）
- ②文学部史学科専門科目「アーカイブズ学演習」への協力
- ③文学部教育学科専門科目「教育学教育実践演習II」への協力

- ④東洋文化研究所一般教育プロジェクト「戦時期の学習院と東アジア」への協力
- ⑤大学開設75周年特設サイトへの協力
- ⑥大学史料館（霞会館記念学習院ミュージアム）への協力
- ⑦学習院VISION150「学習院アイデンティティの涵養と発信によるブランドの向上」（総合企画部企画課）への支援
- ⑧大学計算機センター開設50周年記念誌への協力

### ～中等科卓球こぼれ話 — 表紙の写真より～

1960年代、日本の卓球は荻村伊智朗選手を筆頭に男女ともに世界で活躍していた時期である。

中等科卓球部の活躍も次のような記事で確認することが出来る。「附属戦でも、伝統的に強く、今まで13勝1敗という成績」「豊島区大会でも優勝経験が豊富で、去年などは単戦（シングル）複戦（ダブルス）団体戦の3つの優勝、今まで3回連続優勝でまったくすばらしい成績を治めています。（原文ママ）」（『中等科新聞』昭和38年5月13日発行）

同記事内には「いずれ体育館も、できることですから、今までの数倍ぐらいの練習場所及び練習は可能になると思います。」ともあったが、『学習院百年史 第三編』（1987年）によると1963年に完成した体育館は高等科の使用頻度が高く、中等科ではほとんど使用していなかったとのこと。練習場所の確保はいつの時代も苦労するようである。

学習院アーカイブズ・ニュースレター第23号  
2024（令和6）年7月16日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ  
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1  
TEL 03-5992-1285（直通）  
事務室 北別館

<https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/index.html>